



# 阿部正枝 絵具箱

あべのまさえだ

北溟社

## 小澤克己

「絵具箱」という句集名は、絵を  
隠されている阿部正枝さんにかさ  
わしい、詩意識とともには、その対  
象の把握と描写の確かさは、「絵  
画的なる情景俳句」とも言える  
個性を出されている。その「絵画  
的なる情景俳句」のさらなる深  
まりを期すとともに、ますます  
俳句に絵に動しんで欲しい。

——「序」より

草紅葉川原に開く絵具箱

鉛筆のぬくみ素描の秋の山

さくらんぼ赤一色の童の画

玉堂の文机寂と黄落期

山笑ふ色鉛筆の削り屑

コ  
ラ  
ー  
ジ  
ュ  
の  
や  
う  
な  
山  
門  
濃  
あ  
ぢ  
さ  
る

旅  
人  
の  
や  
う  
に  
巡  
り  
ぬ  
冬  
画  
廊

絵  
の  
や  
う  
な  
思  
ひ  
出  
ば  
か  
り  
夕  
紅  
葉

未  
来  
へ  
の  
構  
図  
の  
中  
の  
照  
紅  
葉

ひ  
ろ  
が  
り  
し  
水  
輪  
四  
月  
の  
風  
の  
声

風船をとばして詩人きどりかな

老僧の酔うて唄ひぬ秋の夜

あるだけの夕日集めて唐辛子

しみじみと構へのかたき栄螺かな

能面の内なる汗を思ひけり

実感は徐々に容に毛糸編む

膨らみて春の水ゆく二つの瀬

高床の穀倉古ぶ落葉籠

春かもめフェリーの上の白き椅子

暮れてより素顔がもどる山の百合

雲流るポプラ一樹に夏きざす

奥入瀬の水音かくす夏の草

畦行くや水澄む余呉の湖を見に

逝く秋の気比の白波尖り来る

鎌倉のふらんす料理春の風

石垣の粗き秩父路白日傘

白く浮く馬柵をはるかに霧流る

五浦なる松に真向ふ春帽子

夢多き頃もすぎたりクロツカス

靴ぬぎて兎とれんげ田の中にをり

意外にも軽きやどかり掌に這はせ

向日葵のあれば後ろの貌が好き

まるく画く童話の山の冬紅葉

絵本より出てこがらしのいたづらさう

空耳か追儼の夜の父の声

枯芭蕉父に氣迫のありにけり

塩鮭を吊して父のあるごとし

母すこしおどけてみせし手毬唄

寒梅や遠くに母の世の見えて

輪飾りや母の齡を越えゆくか

ねんねこやばばとなりても母の欲し

父の世の柵の刻印年の豆

力ある夫の正論冬銀河

生きるとは絆大事に冬の鳥

爽涼の切手の中の星座かな

枯葦の果てたるあたり星一つ

雁渡し沼の真中の白き杭

冬北斗夢にも旅を恋ふるかな

笹鳴や土蔵の崩れそれもよし

句集 絵の具箱

2003年4月25日 発行

著 者 阿部正枝

発行所 北溟社

PDF 製作 俳誌の salon